



1_ 水防工法訓練のロープワークでは数種類もの結び方を学ぶ／2_ 災害時を想定して作った土のうをブルーシートの上に積み重ねる／3_ ロープワークは四国地方防災エキスパートの皆さんなどから教わる／4_ 親子でロープワークに挑戦



特集 輝く勇気 燃ゆる希望

今年も全国各地で大雨による被害が後を絶たない。私たちの住むまちも例外ではなく、常に備えておく必要がある。私たちが今できることは、防災マップを見たり備蓄品を確認すること。そして、災害が起きたときにできることや頼れる人を知っておくこと。災害が起こったとき頼れるのは自分や周りの人。地域を守るため、活躍する女性消防団員取材しました——

5月28日、消防署前の河川敷で令和5年度東温市水防工法訓練が行われた。市消防団、自主防災組織、市内事業所、市職員などが参加し、国土交通省四国河川事務所の防災エキスパートなどから大雨や洪水などの災害時に必要な知識を学んだ。

訓練はロープワークや土のう作りなど4つのチームに分かれて実践的に行われた。参加者はロープワークでは数種類の結び方を教わり、荷物を持ち運ぶときに使ったり、障害物に引っ掛けて命綱にする結び方などを教わった。また、越水対策訓練では参加者は汗を流しながら20kgの重さの土のうを作り、堤防に並べた。

この日、女性消防団員たちも訓練に参加した。「水防工法訓練に初めて参加しましたが、いざというときには改めて自分の身は自分で守ることの大切さを訓練を通して学びました」と女性班長の山崎三和さんは話す。



東温市消防本部 総務予防課 消防団係
渡辺 俊介 主任主事
わたなべ・しゅんすけ

現在、女性消防団員の活動は、平時のときは各地区や学校など救命講習の講師をしてもらっています。また、大規模災害時には、避難所の開設準備や炊き出しに携わっていきます。

女性消防団員の中から積極的に活動に参加したいとの声も聞いているので、今後は活動する幅を広げられたらと思っています。



私たちが できること

「自らの地域は自らで守る」。消防団員は普段、他の職業に就きながら火災や災害発生時には現場に駆けつけ、地域を守る大切な役割を担う。災害時にすみやかに活動できるよう消防団は日々訓練などに取り組み。地域の消防団単位で行われるものから、水防工法訓練やポンプ操法訓練など市内全体で行われるものまで、活動は多岐に渡る。

東温市消防本部総務予防課の渡辺俊介主任主事は「現在の東温市消防団は582人で構成されています。その内19人が女性消防団員です。女性消防団員も地域防災にとって欠かせない存在です」と語る。東温市消防団女性班の活動は、救命講習の指導をはじめ、消防団員加入促進活動や訓練のアナウンスなど積極的に活動する。地域防災の未来の担い手である中学生の防災意識の向上を目的として、3年に1度行われるサマー防災デーが昨年、川内中学校で行われた。サマー防災デーでは消防署員や消防団員などが心肺蘇生法や救護活動、瓦礫撤去やロープワーク、マイ・タイムラインの作成など各ブースに分かれて中学生を指導する。この日、心肺蘇生法を中学生に指導するのは女性消防団員の任務。心肺蘇生法の指導にあたった女性消防団員は1クラス20〜30人に、一人ずつ心臓マッサージやAEDの使い方を教えた。心肺蘇生法を体験した中学生は

「今やる理由は いつかのため」

「心臓マッサージをやってみると意外と固くて、体力を使う。周りの人たちと協力して行わないといけないと感じた」と話した。消防署では女性消防団員が受ける講習が定期的に行われている。昨年夏、応急手当普及員の資格を持つ女性消防団員が資格の更新で消防署を訪れた。消防署員から心肺蘇生法や近年変更があった救護法などを学び直し、心肺蘇生法やAEDの使い方を一人ひとりがロールプレイング方式で実践する。「いざ心臓マッサージをやってみるとできないことや悩んだり迷ったりしたと団員の皆さん

は話をしていました。講習などで自分たちの知識を確認することは大切だと感じます。救護の常識は日々新たなものに変化していきます。新しい知識を常に取り入れていくことも欠かせませんね」と山崎さんは話す。救命講習を行う立場でもある女性消防団員だからこそ感じることもある。「若いうちから知識を知っておくことは大切だと思います。幼稚園や学校などで幼い頃から継続して学ぶ機会が多いほど、『自分の身を自分で守ること』が自然に身につく、身近で当たり前存在になる」と真っ直ぐ前を見つめる。





高校の頃から防災に興味があった 地域の繋がりをきっかけに消防団へ 団員 西原 陽子^{ようこ}さん(町西)

元々高校の頃から応急救護に興味を持っていたので、先生が受けるような講習に自分も参加させてもらっていました。

地域のバレーボールと一緒にしていた人から、子育てが落ち着いた頃に声が掛かり、約5年前に消防団に入団しました。しかし、

入団してから思うように活動ができず、今は実質消防団2年目だと思っています。最近「かしら中」など消防団用語を覚えてきたところです。

消防団以外の他のコミュニティで顔を知っている人もいて、繋がりは大切だなと感じます。

私たちが 今消防団にいる理由

消防団に入ることはゴールではなく始まり。今もこれからも勇気が輝き、希望が燃える

をより身近に感じてもらえる工夫が必要だと感じます」と山崎さんは話す。全国的にも女性消防団員の数は十分ではない一方で、地域で災害が起きたときの女性消防団員の役割は大きい。「いざというときに頼りになるのは自分や近くに住む人。消防団の活動に参加することは自分を守る知識を身につけ、周りの人を知ることができるといい手です。少しでも多くの人が自分たちの今できることは何かを考えて、自分の地域は自分で守るという意識を持つてもらえればと思います」と山崎さんは前を向く。

和気あいあいと話す女性消防団員の皆さんの姿には温もりを感じる一方、消防団の活動中は目の奥に強さを感じる。彼女たちの勇気と希望に満ちた表情はきっとこれからも地域を救う。

現在、消防団女性班で活動する皆さんは20代〜50代と幅広い。働き盛りの世代は消防団と仕事や家事を両立する。女性消防団員の渡部恵理子さんは「消防団に入った時期は、子育てにひとつの区切りができたときです。それぞれの事情があると思うので無理なく入れるタイミングで入団することもひとつの考えだと思います」と話す。

消防団に入団すると、地域の人たちと触れ合う機会が自然と多くなる。西原陽子さんは「消防団に入団して地域の人がよく分かるようになりました。あの人はこんな活動もしてるんだな、またここでも会ったなと地域の人が声を掛けてもらえる機会が増えましたね」と笑顔を見せる。

一方でジレンマを感じることもある。「女性消防団員の充足率はまだ70%近くで、人手不足を感じます。人手が多くなるとできることも増えてくるので、活動

自分の身は自分で守る 子どもたちが憧れる消防団員へ

団員 渡部 恵理子^{えりこ}さん(牛淵)

子どもの頃、父親が消防士をしていたことがきっかけで、いつも身近に消防団の存在がありました。いつか自分も消防団に入りたいと、2年前に消防団に入団しました。生まれ育った場所とはまた違うところもあり、今年は消防団の活動に参加し、雰囲気を知

りたいと思います。元から救急車両の音が聞こえてくるとそわそわしてしまう性格です(笑)。消防操法なども積極的にやってみたいと思っています。親の背中を見ることで、子どもたちにとって消防団が身近な存在になれるように活動できればと思います。



いざというときに守れるのは自分 自分の子どもを守る方法がわかる

班長 山崎 三和^{みわ}さん(南野田)

今年で入団して17年になります。これまでは広報活動やアナウンスなどが女性消防団員の活動の中心になっていましたが、最近では訓練に参加することも増えています。

去年防災士の資格を取得しました。消防団員は応

急手当普及員の講習を受けます。機会もあり、さまざまな知識が身につきます。入団理由の1つが「自分の子どもを守りたい」という思いです。身につけた知識は自分だけでなく、大切なわが子を守るものにもなります。知識はどんどん取り入れていきたいですね。

